実力を磨き、社会で生かせる上位級合格まで、資格試験講座で充実の支援

創価女子短期大学

（東京都八王子市）

創価女子短期大学では国際ビジネス学科の正課の授業でもビジネススキルの育成に力を入れている。短い学生生活でも最大限に学びを深めたいという学生のために、土曜日に無料で13種類の「資格試験講座」を開講している。ビジネス文書検定もそこで指導する資格の一つだ。今回は、1級合格まで支援するビジネス文書検定講座の取り組みを中心に紹介する。

創価女子短期大学

2年間で四年制大学以上の学びを！学生の意欲に応える資格試験講座

「社会において有為な女性リーダーを育成する」ことを教育の目標に掲げる創価女子短期大学国際ビジネス学科。そのために同短大では〝2年間で4年制大学以上の学び〟をモットーとしてきた。大野智弘教授はこれについて次のように説明する。

「短期大学の2年間を単に4年制大学の半分と捉えるのではなく、短いからこそ密度濃くしっかり学んでいく時間と考え、さまざまなことに取り組んでほしい。本学ではそれが可能であると学校説明会でも入学後の講義でも常々伝えており、教員も全員、それを念頭に置いて指導しています」。

同短大の正課科目にはビジネススキルを習得する専門科目群があり、中には秘書検定3級やビジネス文書検定3級レベルの内容を学ぶ「ビジネス実務の基礎」、秘書検定2級レベルの内容を学ぶ「秘書検定中級」、ビジネス文書検定2級レベルの内容を学ぶ「ビジネス文書検定中級」がある。1年生の秋学期から始まるこれらの科目で学ぶのは、ビジネスを学ぶ学生として理解し身に付けたい基礎的な内容だ。正課科目では検定受験は必須ではないが、意欲的な学生は学習成果を形にしようと資格試験にも挑戦する。

正課の授業と併せて、同短大では土曜日に無料の「資格試験講座」を開講。簿記やITパスポート、秘書検定、ビジネス文書検定などの13講座があり、学年問わず、学生はスキルアップのために受講できる。資格試験講座を運営する学習支援センター長でもある大野教授は「資格試験講座はいずれも、将来のキャリアに結び付けることを意識しています。指導担当者は実務経験のある外部講師に依頼しており、単に合格のための指導を行うだけでなく、それらの知識やスキルが仕事でどのように生かせるのかといった実際の職場のことも話してもらえるようにお願いしています」と話す。

ビジネス文書検定については2級と1級の講座がある。

「1級まで挑戦しようという学生は1年生秋学期の正課科目で学ぶ前に、1年生春学期に資格試験講座で学習を始めています」と大野教授。

国際ビジネス学科の大野智弘教授。資格試験講座を運営する学習支援センター長を務める

ビジネス文書検定1級対策講座を担当する田中裕子講師。合格することはもちろん，楽しく知識を身に付け，社会に出てからしっかり役立つ力になるよう指導している

1年生の春学期に「ビジネス文書技能検定2級（基礎）」を受講して6月に3級、秋学期に「ビジネス文書技能検定2級」を受講して11月に2級、そして2年生の春学期に「ビジネス文書技能検定1級」を受講して6月に1級を受験するのがモデルスケジュールだ。

「なぜ」を考え、手書きして、文書の意味と「型」を体得する

田中裕子講師は、3年前から「ビジネス文書検定1級講座」を担当している。学生が自信を持って取り組めるよう、まず講座の最初には「2級に合格して1級を受けようとしていること自体がすごいこと」と話すのだという。

「2級受験から時間が空き、知識が抜け落ちている学生もいるので、1級講座も漢字や送り仮名の復習から始めます。最初はちょっとつまらないかもしれませんが、やがて日本語の面白さに気付き、ビジネスで使う用語への関心も深まっていきます。興味が湧いてくると理解は早くなり、答えられる問題が増えるとやる気も出てくる。このよいサイクルに乗ることができると学習の効果は上がっていきます」。

ビジネス文書はある程度は型通りに書くところから始まる。ただし、型もよく考えて使わないといけない。あまり型にばかり気を取られると、細部の言い回しや、省いてもよいのか、違う言い方でもよいかといったことが分からなくなってしまうからだ。「型の各パートや言い回しの意味をきちんと把握することが大切です。その上で、状況や感情、関係性（立場の違い）を理解して文章を組み立て、言葉遣いを整えます」と田中講師。

このように1級では難しい言い回しを使って社交文書を書き表すスキルなどが必要だが、意外にも、大切なのは「新人や後輩に基礎的なビジネス文書について教える力」だという。

「例えば3級2級では選択問題だったものが、『このように書く理由を説明し、その用例を二つ挙げなさい』と形を変えて出題される。これはまさに、新人指導をするときに求められる考え方。文書の型や言い回しを丸々覚えるだけでは駄目で、やはりなぜそうなるのかが理解できていなければなりません。そのため、講座の中でも『なぜ』を考えるディスカッションの時間をつくっています。これがとても面白いんです。時候のあいさつの季節感がずれている感じがするのはなぜだろうねとか、日本でも地域ごとに違うよね、とか、今だったらどういうのがいいだろうとか。学生が自ら考えて話し友人の考えを聴くことによって、知識が定着していくのが分かります」（田中講師）。

合格のためだけでなく「仕事で発揮できる力を身に付けてほしい」というのが講師としても一番の願い。講座では、過去の受講生の誤答を題材に間違いやすいポイントについて解説したり、解答例を文節ごとに区切って輪読してから手書きで文書を作成したりと、視覚・聴覚をフルに使い、手書きで型を身に付けさせる。まさに「体得」の指導で、学生の力を高めている。

体得した知識とスキルを生かしてさらに次の挑戦へ

同短大、2年生の馬部遥（うまべはる）さんは1年生のときにビジネス文書検定3級・2級に合格し、2年生の6月に1級に合格した。

「社外文書では、敬語だけでなく『万障お繰り合わせの上』のようになじみのない言葉や表現も多いため、すんなり出てこなくて試験で悔しい思いをしたこともありました」と振り返る。

講座を通して基礎から学んだことで、自分自身の成長が実感できているそうだ。

「今は就職活動中ですが、勉強したことがすぐに役立っています。友人が企業宛てに書いてい

最新事情 54……創価女子短期大学

るメールを見て『言葉遣いはこうした方がいいよ』とアドバイスをすることもあって、身に付いているんだなと実感しました。どこに出しても恥ずかしくない文章を、悩まずにパッと書けるというのはとても自信になっています」。

今春短大を卒業し創価大学に編入した古越（ふるこし）理恵さんも1年生のときにビジネス文書検定3級・2級、2年生のときに1級に合格した。

「できるだけ多くの問題に触れたかったので、試験前には図書館で過去の実問題集を探して解き、実践力を養いました。1級まで学んだことで、文書を正しく書き表す力だけでなく、文章から意図を読み取る力、要約する力も身に付きました。大学の先生方への連絡や就職活動の際にもビジネス文書検定で身に付いたスキルが生かせています」。

同短大ではビジネス文書検定1級をはじめとする難易度の高い資格に合格すれば申請によって単位として認定される他、「資格試験奨励賞」が授与され、卒業式にクリスタルの盾が贈られる。「先輩たちがもらっているのを見て、『私も卒業式にクリスタルの盾を持って写真を撮りたい！』というのがモチベーションになっていました」と古越さんは振り返る。

（左から）創価女子短期大学国際ビジネス学科2年生の馬部遥さん，短大の卒業生で創価大学文学部3年生の古越理恵さん。先輩後輩間にある「姉妹の絆」は同短大の特徴。古越さんは週に数回，短大で後輩の学習支援を行うアドバイザーとしても活動している

同短大で学生が学びに向かう姿勢を一段階高めているのは「先輩と後輩の強い結び付き」だ。

「1年生は充実した学生生活を送っている2年生の姿に憧れ『キラキラしている』『輝いている』と表現します。入学時点では自分に自信がなくても、先輩の姿に触発され、自分も頑張ってみようという意欲を持っていくのです。それに対し、2年生も親身になって接しており、本学ならではの〝姉妹の絆〟があります」（大野教授）。

先輩と後輩のつながりは、学習支援や資格取得の支援でも生かされている。古越さんのように検定試験の上位級合格者で併設の創価大学に編入を果たした卒業生が、毎年何人か、短大の学習支援センターでスタッフとして後輩の学習をサポートしているのだ。実際の経験を基にした学生目線のアドバイスは後輩にも理解しやすく、先輩学生にとっても、習得した知識やスキルを生かせるよい機会になっている。

「講座でしっかり学べば、たとえ合格しなくても力は伸びると思います。しかし、合格すれば自信がつき、さらに次に挑戦する意欲が湧く。本学では『資格は社会への自信のパスポート』と言うのですが、自信と挑戦がよい循環になります」と大野教授。学生から「どの資格を受験すればよいか」と質問を受けることもあるというが、資格の種類ではなく「そこまで頑張ったこと自体が評価される」と伝えている。

「理解しようとする意欲やそのために努力できるかといったことは社会から見られています。だからこそ、3級より2級、2級より1級に挑戦し頑張ることが大切。学生にはこのことを伝えていきたいと思っています」（大野教授）。

過去の解答例を見せながら，ビジネス文書の要点や間違いやすいポイントを解説

解答例の文書をレイアウトを記憶しながら輪読し，その後，白紙の枠内に自分で文書を書き起こしていくというユニークな演習。句読点で区切りながら，目と耳で使われている文言を記憶していく（覚えていない部分は解答例を見てもよい）